
猫的な何かの侵略

ナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫的な何かの侵略

【コード】

N0796Z

【作者名】

ナギ

【あらすじ】

フツの社会人で、フツ過ぎる名前の私、鈴木ゆりはある日、自宅の机の上にUFOを見つけた!? そのUFOの中から出て来たのは…猫的な何かだった!?

(あくまで猫的な何かです。猫ではありません。ご了承下さい。)
これはその猫的な何かの侵略の記録である。

侵略開始

「はああ。つつかれたあ。」

私はその日、いつもと同じ様に仕事を終わらせ、いつもと同じ様に家に帰って来た。結構見栄張った立派なマンションです。しかも最上階。富士山だってちょびっと見えます。

「さつさと風呂入っちゃお」

ルルンと靴を脱ぎ捨て、…そこで衝撃の光景を見にした。

「あっ？リビングの電気消し忘れたあ。もう。」

今日の朝、バタバタしてたからなあ。

リビングの扉をバーンと開け…って「はっ？」

私は驚き、尻餅をついた。

小さなUFOがリビングの机の上に乗っていました。

（希望小売価格170円 税別 三分で簡単に完成のヤツでは無いです。）

「えっ？何？何これ？」

よく見れば天井に小さな穴が空いていた。あのUFOがぴったりハマる位のが…ローンまだまだなんですけど。

プシュー

戸惑う私を待たずにUFOの下の部分がゆっくりと開いていく。

「にゃー。」

・
・
・

ソイツはペロペロキャンディーと思われるものを持って出てきた。

ペロペロ。

「あっああああいうえお。よしっ。」

マイクテスト的な何かをしてから猫的な何かは名乗った。

「我はニヤンニヤン星惑星探索又は侵略部隊隊長ニヤマルドだ。宜しくにゃ。」

ニヤマルドと名乗るソイツは三毛猫の姿をしていた。だが二本の足で立って更に喋った。これはオカシイ。

NYAN22強奪事件

「分かったにや？」

「…はい。」

私は夜通しニヤマルドの説明を受け瀕死状態だ。でも収穫も多い。

ニヤマルドはニヤンニヤン星とかの侵略部隊みたいな猫で地球を探索、偵察、場合によっては侵略しに来たらしい。

それとあのペロペロキャンディーは、どら焼き好きの青い狸の便利なコンニャクのキャンディー版らしい。

「これからは此処を拠点として探索を始めて行くにや。しっかり協力を頼むにや。」

「今なんと？」

私の聞き間違いでなければこのバカネコは此処に住むと言ったよね。しかも私に協力しろと。

「我に協力しろと言ったんにや。」
聞き間違いじゃないみたいですよ。

「そんな事しないわよ。私は毎日仕事仕事で忙しいの。」
ニヤマルドが考える様に頭を叩く。

「そうかにや。…ああ、もう面倒だにや。侵略してしまおうかにや。」

ニヤマルドがUFOの中に戻るうとする。

「させないわよ？」

私は最近で一番の速さで動き、UFOを持ち上げた。

「にやー？何をする？」

ニヤマルドがじたばたする。

「あんたが変な事しない様にコレは私が預かります。」

「引つかかれてもいいのにや?」

ニヤマルドの爪がシャキンと伸びる。

うっ、怖い。

でも私にはコレがある。

「ニヤマルド。あんたが私を引つかいたらこのUFOなんか握り潰すわよ。」

「なっ?」

「分かった?」

「…はい。」

ニヤマルドがピシツと正座をしたままそう言う。よっぼど、大切なんだろう。

それより…

「可愛いわね。あんた。」

三毛猫の正座。めちやくちゃキュート。

「可愛い?我が?人間は美的センスがオカシイにや(笑)」

「オカシクないわ。てか(笑)入れんな。」

人間以外で(笑)を使う生物がいるとは驚きだ。

「NYAN・22を返してもらうには何をすればいいにや。」

ニヤン22?可愛い名前ね。壊す気が失せたのは内緒よ。

「そうね。取り敢えず掃除かしら?」

ニヤマルドが立ち上がる。怒っちゃったかな?

「了解したにや。人間、さっさと仕事に行くがいいにや。」

ニヤマルドは真面目でお堅い性格らしい。

てか、名乗ってなかったわね、私。

「ニヤマルド。私は 人間 なんて名前じゃないわ。」

「なんと？ カマキリだったのにかにゃ。」

「はひっ？」

「地球で言語を使えるのは人間とカマキリだけだと聞いたにゃ。人間じゃないのならカマキリなのだろうにゃ。」

えっ？カマキリって言語使ってた？ てか、何でカマキリ？反応に困る微妙な生物じゃん。

と驚いた後、説明を始めた。

「違うわよ。人間だけど名前はゆり、鈴木ゆり。」

この名前は嫌いだ。鈴木なんてありふれた苗字好きになれない。

早く結婚して変えちゃおうと思っても男縁が無いです。

なんて可哀想な私。

「可哀想だにゃ。」

何で分かるの！？この気持ち？もしかしてニヤマルドもありふれてるのかな？

「それより、仕事は大丈夫なのにゃ？結構、時間経ってるにゃ。」

サツと振り返り時計を見る。

時計の針は二本とも上を向いていた。

「10時？ヤバい？」

この不況で職を失うと言うのは大変な事だ。

私は急いで支度をし咲馬駅へ走った。服は昨日のままだ。気付かれませんかように。

この時、私は忘れていた。

掃除を頼んだ相手が宇宙から来た非常識人だと言う事を。

マタタビ権利条約

ガタンゴトンガタンゴトンと電車に揺られながら帰宅中の私です。今の心境 - めっちゃ不安。

ニヤマルドは地球人じゃない。まして地球猫でもない。猫的な何かだ。

掃除とか言って全て捨てられてたらどうしよう。

あつ？　なんか変なフラグつけてんじゃん、私。ヤバイよ。

「うーん。どうしよう。」

つい、口に出してしまった。

「何、困ってるの？」

電車内で隣の人に話しかけられるというのはそりゃあ驚く。

「へっ？えっ？正樹？」

私の隣にいたのは99%正樹だった。

1%は正樹のクローンを考慮したから。

UFOが実在する様なこの世界だもの。何が起こつても驚かないわ。

「当たり前。大つきくなったねえ。ゆり。」

嫌味だ。正樹は180cmという日本人とは思えない巨人だ。

でも、確かオカルト好きらしい兄はもつとデカかった。一回、会った時、驚いた覚えがある。

UFOとかモアイだらけの部屋にも。

中学で小さかった私はいつも牛乳飲めよとかちゃんと寝てるかとか言われまくった。

「正樹って沖縄の実家に行ったんじゃ？」

正樹は高校に行かず、沖縄のさとうきび畑の実家を手伝いに行っただ。はずだ。

「いろいろ…あつてな。」
いろいろって便利だなあ。凄いい訊きづらい。てか訊けない。更に言
い方がカッコ良い。

「ふーん。」
次、四宮か。もうすぐ、降りないとなあ。ちょっと残念。

「ゆりももう携帯持つてるだろ？コレ。」

正樹はポケットからカッコつけてメモ帳を取り、カッコつけて1枚
破り、カッコつけて何かを書き、カッコつけて私に渡した。

予想というか確信を持ってソレを見ると案の定、数字が並んでいた。
「連絡してよ。俺、車買ったんだ。ドライブにでも行こうよ。じゃ。

俺、ここだから。」

正樹はカッコつけてジャケットを直し、降りて行った。

四宮駅。私の咲馬駅はこの後。結構家近いな。
それより

「あんなカッコつけだったっけ？」

カッコ良かったけど。

「あなたさん。ああいうのはやめといたほうが良いよ。」

今日2度目の隣から話しかけられる私。

2度目の方はお婆さんだった。

「ああいうカッコつけはイケメンでも、ロクな男じゃない。」

そっぴや、結構、イケメンだよな。あいつ。

「いえ、別にそんな気ありませんから。」

言っておきながら自信は無くなっていた。告白されたら断れないか
もと。まああり得無いけどな。つくづく悲しくなるわ。

「なら良いんだけどねえ。」

お婆さんの目がキラリと光る。お婆さんて怖い。

「助言、有難うございました。」

咲馬駅到着のアナウンスが入る。
よしっ。ナイスタイミング。降りる駅だ。

四宮駅と咲馬駅はすごい近い。一時期どっちか壊そつと言つ話が
上がっていた位に。

咲馬駅さえあれば良いんだけど。

「頑張りなさい。」

最後にそんな声が聞こえた気がした。

「ふうう。落ち着こう。」

鍵を持つ手が震えている。

我が家はどうなっているだろうか？

「よしっ。」

勇気を出して…GO？

• • •

「おかえりにゃ。掃除だけでは申し訳にゃかったから快適化して置
いたにゃ。」

• • •

「どづした？具合でも悪いのかにゃ？」

・
・
・

「全く、人間はひ弱で困るにゃ。」

・
・
・

「…ニヤマルド。」

「なににゃ？」

「無駄なことはしないでつて言ったじゃない？ なによ、これ。宇宙ステーション？ていうか、ディベアのディベアちゃんは何処よ？何よ？これで私が喜ぶと思った？落ち着けないじゃない。意味不よ。大体、こんなにするための材料どうしたのよ？この壁なんかめっちゃくちゃ硬いじゃん。鉄じゃないでしょ。何？新しい鉱物ですか？私の部屋を研究者が喜ぶ様な感じにしないでよ？ まあ、このでっかいテレビはそのままでもいいけど…。他はちゃんと元に戻しなさい？」

「にゃ？」

ニヤマルドがとぼけた仕草で言う。

「わかんないフリなていらないわよ。早く戻しなさい。」

ニヤマルドはようやく言われた意味が分かったと言う様にあたふた

し始めた。

「申し訳ないにや。そう思うとは思わなかったのだにや。だが、頼むにや。一部屋でもいいから我に居場所をくれにや。頼むにや。」
必死な形相でニヤマルドが言う。

てか、一部屋？ウチはリビングとトイレ、寝室…だけですけど？もつと金が有れば大つきい家にしたかったけど。

「そつだ？」

良いことを思い付いた。宇宙人なら…

「何にや？何にや？」

ニヤマルドが興奮して尻尾をブンブン振る。思いつきり猫じゃん。

「あなた、金、作れる？」

偽札じゃない偽札が作れるんじや。

「此処の金にや？いちよう、百万程作つて来たにやが？」
来たああああああああ？

「ニヤマルド。その金、ちようだい？」

私なりに可愛く行つてみた。

「駄目にや。」

きつぱりと言ひ切る。

「何で？」

「この金はマタタビ用にするのにや。他の物には使えんにや。そもそもこの地球に来たのは視察、侵略、いろいろあるが本心を言えば、マタタビを買いに来たのだにや。」
冗談抜きの顔でそう言う。
マタタビの為に百万？

これはまだ希望がある。

「ニヤマルド？マタタビの相場つて知ってる？」

まずは相手の知識を確認。

「よく知らんにゃ。百万あっても足りないのかにゃ？」

世間知らずが悪いんだ。そうだ。私は悪くない。

「うーん、足りないちゃー足りないけど私に任せてくれたらたんまり買ってこれるよ？」

ちよつと騙してるみたいで罪悪感、あつたけど仕方が無い。

「何故、ゆりに任せれば安くなるのにな？」

ふふーん。理由もかんがえてありますよ。

「私の知り合いにマタタビの商売をしてる人がいてね。そのコネで安くしてもらえるの。」

実際、そんな人居ません。

「おおそうかにゃ。じゃあ頼むにゃ。これにゃ。」

そう言うとうちの壁の一部をポチッと押した。

すると壁が割れ、中からアタッシュケースが出て来た。

ニヤマルドがぱかっと開ける。

「どつにゃ？」

自慢気に言うニヤマルド。

だが、ソレは…

「何時の時代のよ？」

時代劇の小判にそっくり。

「なにっ？これは違うのにゃ？昔、調査に来た者達がサンプルとして持って帰って来た物を作って来たんだがにゃ？」

昔じゃ駄目よ。

「ぜんぜん違うわよ。」

私の百万が…

「そんな…私のマタタビ…」

すごくかなしそうにニヤマルドが肩を落とし、言う。
物凄く可哀想だ。

「しょうがないわねえ。私が何とかしてあげるわ。」
本当はマタビなんてそんなにしないもの。多分。

「本当にや？」

ニヤマルドが飛び上がり目を輝かせる。

「ええ。でも、その代わり……」

不安そうにニヤマルドが言う。

「何にや？」

私の目がキラリと光る。

「私の言う事聞いてもらうわよ。」

マタタビ購入遠征

「これで良いのじゃ？」

ニヤマルドが誓約書を私に手渡す。

「ええ。OKよ。」

上機嫌で私がそう言うとニヤマルドが訊いて来た。

「だが、こんな事で何になるのだじゃ？外に出る時は首に紐をつけ、四つん這いで歩けとか、くだらんことばかりだったではないじゃ？」

地球で猫が首輪付けるのは当たり前です。二本あしで立ってたらおかしいです。

「まあ、気にしない気にしない。じゃあ早速部屋、戻してくれる？全く、こんな部屋じゃ落ちついてなられないわ。」

「うむ、仕方が無いじゃ。これもマタタビのため。」

「テレビは良いのよ？」

忘れずに付け加える。

「分かってるじゃ。ゆりは早くマタタビを買って来てくれじゃ。」

「うん。分かった。」

マタタビって何処で売ってんだろ？全くわかんないや。

そんなことは言えないので私はお出かけ用バックに財布やらなんやらをいれ、

「言って来ます。」

と外に出た。

「取り敢えず……」

携帯でマタタビ検索。

ふーん、おっきなペットショップで売ってんじゃない。

「行きますか。」
哀しげに呟き、私は近所のペットショップ、『ペットショップ中田』
に向かって歩き始めた。

ウィーンと自動ドアが開き暖かい暖房に身体が休まる。

思えば私はTシャツ一枚とジーンズという12月じゃあり得無い格
好をしていた。ニヤマルドとの言い合いで暑くなってたから気付か
なかった。

「何かお探しですか？」

親切そうで顔も良い女性店員が訊いて来た。

こういう人は商売に向いているし、人付き合いも上手い、神の恩寵
を受けた人間だと私は思う。

私もこんな良かった。

「どうしました？」

私が黙っているので心配したのか。

「いえ、ちよつと考え事をしていましたもので。えーと、マタタビって
売ってます？」

「ええ。此方です。」

そう言っただけで歩き出す。

「猫ちゃんってカワイイですよね。」

唐突に店員が訊いて来た。

「ええ。カワイイですよね。」

ウチのは猫的な何かであって、猫ではないのだけど…
まあカワイイ。

「ここら辺ですね。」

何時の間にかマタタビゾーンに着いていた。

「ありがとう。」

「いえ。」

なんかこういう社交辞令みたいなイラつくんだよなあ。

「私、獣医の資格も持ってますので困ったときはなんでも訊いてください。」

出たよ。神の恩寵。私は資格とかゼロだし。

「では、ごゆっくりどうぞ。」
「やっと思ってくれた。」

私って性格悪いと自分でも思った。

「さてと、安いやつ安いやつ。」

最初は安いやつにしないと、高いやつのを覚えちゃったら困るからね。それにニヤマルドには勿体無い。

「これかな？」

私はそこにあったる番目に安いのを持って、レジに向かった。

なんだかんだいってニヤマルドの喜ぶ顔が見たい私がいいた。

入浴強行計画秘密進行中（前書き）

短いです。すみません。

入浴強行計画秘密進行中

「これにやこれにや。にゃー。」

只今、マタタビ堪能中、ニヤマルド。

すごいカワイイ。なんか、堅苦しい感じが、消えて完璧にねこっで感じ。

コロコロしてる。もうカワイイ。

「最高にゃ。」

ご機嫌な様で私も嬉しゅうございます。

私もご機嫌だけどね。

部屋はなんか綺麗にかたずいてたし、テレビは大きいし、ニヤマルド可愛いし。

「私も最高にゃ？」

「ニヤーニヤー。」

「にゃー？」

「ニヤー？」

「ニヤンニヤン。」

「にゃん？」

その日、私とニヤマルドはコロコロして過ごしたとさ。

「例のヤツはどうなってる？」

黒いスーツでビシツと決めた男が誰とは言わずに問いかける。

すると、一人の男が、

「只今、監視しています。安心して下さい。逃しはしません。ですが、出来るだけ早く接触し、確保して下さい。ヤツの力は未知数です。早くするに越したことはありません。」

「そうか。」

数日が経った。

猫というものが好きになった。

凄いと和むし、ウチのは働き者だ。

例えば…

「ニヤマルドー。そのリモコン取ってえ。」

後もう少しだけど届かない。そんな時。

「ほいにゃ。」

ウチのニヤマルドは腰が軽い。

他にも…

朝、出勤前。

「起きた方がいと思うにゃ？」

「ううう。ありがと。」

良い目覚まし機。

とっても役立つ猫なのです。

あつ？ 猫って言っても本当は猫的な何かですけどね。

「ゆりが見たがってた番組にゃんだがな。録画しといたにゃ。」

テレビを見つめたままニヤマルドが言う。

すっかりくつろいでいる。

「ありがとお。後お風呂掃除なんだけどさあ。」

「分かったにゃ。やっておくにゃ。我には良さが分からんがにゃ。」

あんな、気持ち悪くなるもの。「
ニヤマルドは猫らしく水が嫌いだ。
当然、風呂も。」

でも、ちょっと汚れて来てるから、いつか、洗うか。とこっさり計
画を立てている私だった。

個人（猫）情報流失事件（前書き）

登場人物（又は猫）紹介です。

募集の件は読んでもらいたいです。（最後の部分。）

個人（猫）情報流失事件

ニヤマルド

ニヤンニヤン星惑星探査又は侵略部隊隊長で地球を調査しに来た猫的な何か。

腰が軽い。堅苦しい性格で現在は鈴木ゆり宅に居座っている。猫らしく水が嫌いでマタタビ好き。姿は三毛猫にそっくり。爪が鋭く、近接格闘戦も結構得意。ニヤン22を鈴木ゆりに強奪されたため、家事を手伝わされている。今はマタタビのためにいろいろ契約した。もはやマタタビ中毒。隊長なので部下も……？

種族名は

(^|^;) すみません。決まっています。何か案があれば感想をお願いします。

ちなみに今、思い浮かんでいるのは、「猫人」のみです。

鈴木ゆり

平凡な社会人。資格とかそういうものもゼロ。特別凄いこともないというのが特徴。見え張って高いマンションにしたが、ニヤン22によつて天井を破壊された。ローンは後…口に出したくない位だそうです。ニヤン22を所持中。男縁無し？。自分の名前にうんざりしている。ニヤマルドを入浴させる作戦を今もこっそり考えている？愛用駅は咲馬駅。

今回はここまでです。

個人（猫）情報流失事件（後書き）

今もニヤマルドの種族名募集中です。感想のときはユーザーに限らず無制限に開けているので是非お願いします。

高火力熱原体（前書き）

最初は見なかったことにしてやって下さい。

高火力熱原体

「やめるにやーやめるにやー？ 溺れ死ぬにやー。」
爪が煌き私の手を切り裂く。赤い液体がシュツと出てきた。これ以上続けるのは危険だ。と本能が訴えかけてくるが無視して続ける。
こんな中途半端なところで終わらせられない。
もう少し、もう少し…
グサツ
「きゃあ？」

「…もう、二度と…しません。」
頭を地につけ言う。ホントにやらなきゃ良かった。毛は綺麗になっただけど被害が多すぎる。
「分かれば良いのにや。ブルブル。」
凍え死にそうなニヤマルドが威張って言う。
早く拭いてやらないと。
ぐっ？ 体が動かない。手が痛すぎる。
「我は少し散歩に行くにや。」
ブルブルと身体を振りながらニヤマルドは首輪を付け、四足歩行で家を出てしまった。
止めないと思ったが止められなかった。それがニヤマルドの照れ隠しだと分かったから。
「でも、」
あんな身体じゃ。

「風邪引いちゃうよ。」

私は最後の力で立ち上がりコートを被り、ニヤマルドを追った。

「ニヤマルドー？」

もう、どれ位捜しただろう？

ニヤマルドは見つからない。

「何処に行ったのお？」

本当にヤバイ。私のせいだ。

神様お願い。ニヤマルドに会わせて。

「と言う夢を見たのであなたを洗うのは辞めました。」

ヤバイヤバイ。何これ。火傷だよ。これ。熱すぎるでしょ。燃えちゃうよ。焦げちゃうよ。燃え尽きちゃうよ。

「アアアアア」

ニヤマルドを放り投げ、台所に向かう。

「みいずうう！」

水道の蛇口を豪快に回し、水道代とか関係無しに水を出す。

本当に熱い。暑いじゃなくて厚いじゃなくて熱い。

宇宙人の熱は尋常じゃなく熱い。

「これは早く病院に！」

いや待て。病院じゃニヤマルドが猫じゃないことがバレるし広まってしまう。

そしたら宇宙人のニヤマルドは…

「そうだ！」

ペットショップ中田のあの店員？

獣医の資格持つてると言ってた。

1人なら口封じ出来る。と思う。

「早く呼んで来よう？」

こんな時、車があれば早いのに。

「そうだ！正樹。」

あいつ、四宮だったし車買ったつて言ってたじゃん。

私はちよっとくしゃっとなっていた電話番号を携帯に打ち込んだ。

早く？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0796z/>

猫的な何かの侵略

2011年12月10日21時45分発行